スイス日本語福音キリスト教会

JEGニュースレター133号

www.jegschweiz.com　　２０１３年３月２８日発行

小さな証

いまも放射線への不安の中で生活する福島県民、この現実にいかに向き合い、いかに生きようとしているのか、一人のキリスト者の証です。

オルテン家庭集会

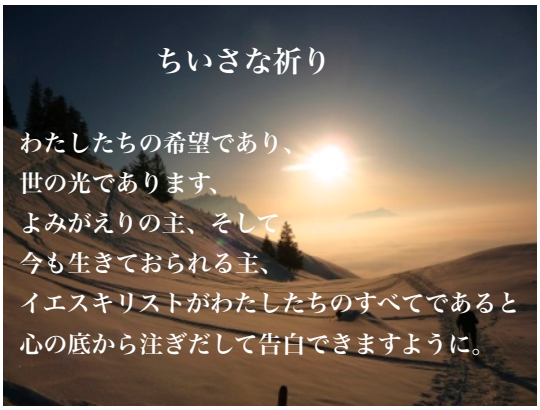
オルテンで随時開かれる家庭集会はノンクリスチャンや若者も集うバラエティに富む特別な集会になっています。

被災地からのレポート

宮城県オアシスライフ・ケアの中核として被災者のなかで働く菊地祥彦神学生からの迫真のレポートです。

箱船の家族達

津波で持てる財産の全てを失ったキリスト教印刷所の阿部克衛さんが、信仰を失うことなく廃墟から立ち上がった希望の物語です。



『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』
マタイ２５：４０

ちいさな証

ふくしま、大震災から２年

阿部恩（めぐみ）
二本松バプテスト教会

東日本大震災から２年が経ち、ここ福島市では、ほぼ震災前の生活に戻りつつあります。新たに加わったのは放射線とのつきあい。福島市は今でも事故前の基準である年間１ミリシーベルトを超える地域ですので、私の町の公民館には食品の放射性物質分析機器がおかれ、庭や自家菜園で採れたものに含まれる放射性物質の量がはかれるようになっています。また町会でも線量計を買って、町民に貸出しすることができるようになり、学校や公民館などから始まった除染も、今は住宅にすすみ、我が家も来年度には除染が入る予定です。公園では除染によって土が削られたため、根がむきだしになり、その後の強風で４０年近く育った大きな松や杉の木が何本も倒れました。放射線の影響はこんなところにも及んでいます。

あまりにも大きな揺れに、死ぬかもしれない、と覚悟をした経験は、その後の私の生き方に影響を与えることになりました。人は死ぬとき何一つ持っていくことはできない、と身をもって経験したのです。それは非常持ち出し袋を作っているときでした。お気に入りの服や靴、今まであれがほしいこれが欲しいと買ってきたものが、非常時に持ち出せないばかりか、もし持ち出せたとしても役に立たないということが分かったのです。ヒールがあったり指先が出るサンダルなど、非常時には危険なだけです。いかに今まで「欲しがりすぎていた」かということに気づいたのです。

勤務地；福島県立医大、震災時、駐車場は自衛隊のヘリポートとして使われ負傷者で埋まっていた。

また、「死を覚悟した」後、命が地上に残されていることは、まだやるべきことがあるということだと思いました。現在もそうですが勤務先は災害拠点病院である福島県立医科大学です。千年に一度といわれる大地震のとき、ここに職を与えられているということは偶然ではないと思いました。ここが神から与えられている地、預けられているタラントだと思いました。横浜に住む弟からも、さらには牧師からも、避難を勧められましたが、ここにとどまるべきだという思いで毎日仕事に通いました。ガソリンがなかったり、車も流されたりして多くの人たちが避難できずにおり、なぜ死んでも天国にいける私が先に逃げることができようか、という思いもあったからです。

私は主の前に正しく生きているか。これが震災後の私の姿勢です。放射線についていろんな人がいろんなことを言います。自民党は過去に原発推進してきたにもかかわらず、こんな事故があっても自民党が与党になり、再稼動や原発輸出など、理不尽なことばかりです。

しかし、私が期待すべきは主のみであること、さまざまな不満は主の前にそのまま持っていくこと。人はどうでもよい、私は、主の前に正しく生きること、これが私の姿勢であり毎日の目標です。

今、目の前で起きていることは、神から与えられたものである、とせめてクリスチャンはしっかりと認識する必要があると思っています。現実に抵抗すること（反原発・脱原発は別として）は本当に必要なのかと考えています。与えられた中でできるだけのことをします。我が家も早期に芝生をはがしたり、窓辺に水を入れたペットボトルを置いたり、こまめに拭き掃除をしたりと、線量が下がるようにできるだけのことをしました。起きるかどうか分からない健康被害について心配し続けるよりも、実際に津波で近しい人を亡くしている人のことも考えてはどうかと思うのです。神から与えられた現実、と受け止めない大人を見ている子供たちはどう育っていくのかと思ってしまうのです。

ご存じの通り、今年のNHK大河ドラマは福島県が舞台、クリスチャン新島八重が主人公です。困難なこの時代に私たちクリスチャンがどう生きるか、どう神の栄光をあらわすか、と問われているのは間違いないと思うのです。地震の揺れからも私を守ってくださった主は、放射能からも私を守ってくださる、と原発事故直後から確信しています。しかし、もし、放射能による健康影響が将来出たとしても、全て主の御手の内にあり、私の人生の全ての責任を主が負ってくださる、と信じています。

スイス教会の兄弟姉妹が、いつも日本のことを気にかけていてくださり感謝しています。続けて、日本のクリスチャンが元気であるように、また日本の魂の救いのためにお祈りいただければ嬉しいです。

「主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。」
ホセア６：２

阿部恵姉は福島県立医科大学・災害医療総合学習センターに勤務されています。ドイツでの語学研修中やご旅行で、スイス教会に幾たびかおいでになり、お交わりさせていただきました。

１、３月１０日（日）のスイスJEGはマイヤー・マルティン牧師をお迎えして東日本大震災記念礼拝を守りました。マイヤー牧師はその日テレビから流れてきた震災の生々しい場面に深い衝撃を受けられ、その体験を交えて”祈りの闘い”というテーマで”ダニエル書６章の１–６からみことばを解き明かされました。

なお、東日本大震災記念礼拝における特別献金は１２２０スイスフランと７０ユーロでした。被災者に心を寄せての兄姉の温かく尊い献金を心から感謝します。この献金は４月２４日－２７日、被災地にオアシスライフ・ケアー、ならびにお茶の水クリスチャンセンターを訪れる本園万子姉によって直接届けられます。なお、１０日の特別献金の機会を逸した兄弟姉妹は４月１０日にもお受けしますので本園姉に直接お渡しくだされば幸いです。

２、３月２４日（日）スイス教会では、ミラノ賛美教会から内村伸之牧師をお迎えして、教会歴より一週間早く、６０名近い兄弟姉妹と共に、復活の主イエスを崇め、大変祝福されたイースター礼拝を持ちました。内村牧師は「しかし、よみがえります。」と題して、マタイによる福音書20:18-19からメッセージを取り次いで下さいました。

ユーゲントバンドの素晴らしい賛美

なお、内村牧師は、スイスJEGでの礼拝に先立って、２２日（金）はフランス・ストラスブールでバッハの「マタイ受難曲から紐解く聖書」をテーマに、若い音楽学生を前に聖書からお話下さいました。２３日（土）は、午後３時から今村兄姉宅で「バッハのマタイ受難曲と十字架上の言葉」そして「イタリアの絵画から紐解く聖書」という講座を二部構成で持たれました。２０名の参加者があり祝福されました。

なお、マイヤー牧師ならびに内村牧師のメッセージは、スイスJEGの説教専用サイトからお聴き戴けます。http://jeg.meielisalp.ch

３月２４日の愛餐会スナップ

オルテンの家庭集会は不定期に行われ、1月26日にロンドンから小川洋牧師をお招きして家庭集会をして以来、今年は2回目の家庭集会です。今回はテイーンエージャー、未信者を含め20人の参加者が与えられました。3年来お招きして断られ続けていた近所に住む未信者の方が初めて集会に来られたのは感激でした。

今回は前日ストラスブールで取り上げられたのと全く同じ「バッハのマタイ受難曲と十字架上の言葉」そして「イタリアの絵画から紐解く聖書」という講座を二部構成でしていただきました。

我が家の居間の中がパンクするほど、方々から人々が集ってくださり真剣に耳を傾け、活発に質問や応答をして下さり、学生の参加者が多いストラスブール集会とはまた反応の仕方も異なり、とても興味深いものでした。

また集会の後、皆で共にお食事をし、聖書の話またその他諸々の話に花が咲き、別れの時間が名残惜しく、最後の方が帰られた夜9時半まで共にお交わりを楽しみました。神様のお導きに従って、またこの会を続けさせていただく事ができればと願っています。　今村泰典

３、３月２４日（日）午前９時より、ウスター市にて、役員ならびに世話人会メンバーを対象に、「サーバント会」が１１名の参加を得、ゲルスタ牧師夫妻を講師として開かれました。テーマは「与える」ならびに「教会のアイデンティティ」で、聖書からの学びと討論の時を持ちました。

サーバント会

４、７月３１日から８月４日まで、フランス・フォンテーヌブローで開かれる第３０回 ヨーロッパ・キリスト者の集いの申し込みを現在受付中です。４月１４日（日）までに添付申し込み書に必要事項を書き込んで松林兄へお送り下さい。一人でも多くの兄弟姉妹が、主の臨在する祝福された素晴らしい集いに参加され、恵みが注がれますことを祈っております。ご質問ならびに受付は：kojiromatsubayashi0@gmail.comまで。第２信ならびに申し込み書はヨーロッパ・キリスト者の集いのホームページにもアップロードされていますのでこちらからもご利用いただけます。http://europetsudoi.jimdo.com

５、オーニンガー宣教師、クンツ・プリシラ宣教師、ラシェンコ・ベラ宣教師からのRundbrief　、工藤篤子メールマガジン１９２号、井野葉由美メルマガ９７号、バルセロナ日本語で聖書を読む会月報、デュッセルドルフ日本語教会月報、ケルンボン教会月報、ルーマニア川井牧師の週報、イザール通信、夜越山祈りの家月報届いています。お読みになりたい方は、松林までご一報下さい。

被災地からのレポート

神学生　菊地祥彦

宮城県オアシスチャペル 利府キリスト教会

スイスJEGのみなさんの被災地に対するお祈り、サポートに心から感謝いたします。あの震災から2年が経ちました。2年間、いろんなことがあり、本当にあっという間でした。時間は着実に経過していきます。しかし、被災地の復興が着実に進んでいるのかというと、まったくそうではありません。ただ瓦礫がなくなっただけで何も変わっていません。むしろ悪化したり、新たに浮上している問題もたくさんあります。

そのような被災地の現状を見聞きする度に、複雑な気持ちが湧いてきます。被災地では未だに避難生活を余儀なくされている30万人以上の方々がおられます。悩みやストレスの絶えない生活を強いられており、特に将来の移転先や住宅の再建については多くの方々が不安を抱いています。災害公営住宅は、約2万戸を建設する予定ですが、3月末までで計256戸にとどまっています。

先日、訪問した仮設住宅は、被災地の中で真っ先に集団移転が決定した地域で、これまで災害公営住宅のための土地の確保やコミュニティデザインの計画を進めてきましたが、移転には相当な時間がかかってしまい、早い人で今から2年半、遅い人では6年もかかってしまうそうです。その他にも、人口流出や雇用のミスマッチング、コミュニティの不和など、被災地には問題が山積しています。

このような被災地の問題について、海外ではほとんど報道されていないと聞きます。しかし、残念ながら日本国内でも、東北以外ではかなり震災関連の報道が減っていると聞きます。先日、関西から来られたボランティアの方が「関西では仮設住宅が今も存在することを知らない人たちがいる」と話しているのを聞いて、複雑な思いになりました。そんな中で、「震災を忘れさせない」ために立ち上がっている人たちもたくさんいます。

先日『遺体~明日への十日間』という映画を観に行きました。壊滅的な被害を受けた岩手県釜石市で、震災直後の遺体安置所で奔走した方々を描いた作品です。とてもリアルな映像に見続けるのは正直辛かったですが、そのような映像をつくる俳優やスタッフの覚悟が伝わってきました。この映画に携わったのは「あの日を忘れない」「震災を風化させない」という思いをもって集まったメンバーだそうです。このような「覚え続けよう」としている人たちがいるのは、被災者の方々にとって何よりの喜び、励ましとなるでしょう。

私は、オアシスライフ・ケア(宮城県利府町にあるオアシスチャペルが設立した被災地支援団体)のスタッフとして、これからも沿岸部に住む苦しんでいる人々に仕える働きに携わっていきます。震災から2年という節し目によって、行政や支援団体の多くの支援が打ち切られています。被災地域で支援活動に取り組んできた教会もかなり苦しくなっています。ぜひ現地に置かれた教会が被災者に寄り添い続けられるようにお祈りください。私たちはこれからも被災地にあって神様の使命に生きていきます。

URL：http://www.oasis-chapel.com

新しい希望と相応しい助け

神奈川県は川崎市の
大八木タビタ姉から

東日本大震災から二年経ちました。

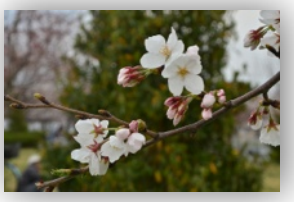
日本では、3月11日前後に震災を思ういろいろな番組が放映され、新聞にもいろいろな記事が載っていました。妻と、生まれたばかりの息子さんを失った人のお話や、亡くなったお姉さんの高校の制服のリボンを胸につけて、同じ高校に入学した妹さんの話。「お姉さんの分までがんばります。」と書いてありました。そして、子供を守るために九州に移住した方のお話。

日本をひとつの体にたとえると、大きな傷を負ってしまった部分といっしょに、ほかの部分も悲しんでいるように思います。私たち、菅生キリスト教会としては、何回か募金を集めて、東北の、ある教会にお送りしました。電化製品をお送りしたこともあります。大きなことができなくても、ひとつの教会として被災したひとつの教会を励ましてあげられたらと思いました。

菅生キリスト教会

しばらくのスイス滞在の後に日本に帰ってきた私たちは、本当に暖かく迎えられました。幼稚園のお母さんたちと、子供の健康についての心配事を分かち合ったり、健康な食材を手にいれることについて情報を交わしたりしました。でも、放射能の汚染はますますタブーな話題になって、親しい仲間でないと、口にしないほうがいいと気付きました。今もそうです。「もう大丈夫だ」と言う雰囲気は漂っています。しかし、ニュースに出ていなくても、インターネットで調べれば、心配する要因は十分あります。

私は一時その心配に押しつぶされそうになる時期がありました。でも、神様に取り扱っていただいて、その心配をイエス様に預けることができました。「主よ、どうぞ私たちの子供、そして周りの子供たち、そして、私たちよりも危ない地域に住んでいる日本の子供たちをお守りください。」と祈ってやみません。



また、「東北地方で、愛する家族、ふるさと、財産や職場を失った人々に、新しい希望とふさわしい助け、そして困難に耐える力をお与えください。」と祈ります。3月10日の新聞記事によると今まで避難生活を送って来た人々の6割、5万4千人の人がさらに4年間、自分たちのふるさとに帰れないとのことでした。政府は福島県のあちらこちらに数十戸の復興住宅を用意してくれるようですが、まだ計画中です。

そして、私たちをも大きな困難が襲って来る可能性があります。ただ、神様を信じて御手のうちにすべてをゆだねたいと思います。

DRCnet(東日本大震災救援キリスト者連絡会)の働き

東京はお茶の水クリスチャンセンター
松下瑞子姉から

2011年3月11日の大震災から２年経ちました。その間多くの方々の祈りと献金は、被災地の方々への大きな励ましと助けになり、又私たち災害支援に関係する者たちにとっても感謝なことでした。スイス福音日本語教会の皆様のお祈りと献金も有り難うございました。

DRCnet(東日本大震災救援キリスト者連絡会)は発足した当時から、被災各地のクリスチャン支援ネットワークのハブ的な働きをすることにありました。被災地のニーズと支援側の援助の分野を繋ぎ合わせる事が大きな目的でした。しかし、そうした情報収集とマッチングを続けて行くうちに、色々な必要性に気づかされました。

当初、何はともあれ物質支援を求める被災地の方々への援助と支援者側の繋ぎの働きのために、多くの時間を費やしましたが、数ヶ月経つうちに物質支援と共に、心のケアの必要性、疲れている働き人への支援（特に牧師たちの説教支援）福島の放射能問題への支援として放射能測定器の配付（一台安くても２万円位）、韓国の教会からの支援で始まったLED十字架の設置(現在迄30教会に設置)、災害対応チャプレンプログラムの養成コースなど働きが加わってきました。

宮城県南三陸町の防災庁舎跡

本来の情報を伝えるハブ的役目は私たちの働きの土台であり現在もそこにありますが、物質的、精神的援助、被災教会の支援も又続けてゆかなければならない大切な活動です。

DRCnetは３年目に入りつつある現在、活動を続けて行く是非を再度探り続けてきました。特に震災後時間の経過と共に、資金的な面では困難になってきております。しかし、被災地での必要性は、今日明日終焉するものではなく、「私たちを忘れないで下さい。」と言う声を無視する訳にはゆきません。

そして、きっとこれで終わりと言う時はないでしょう。ですから、続けられる中で御心に従って続けて行ける事を願っています。少なくともこの一年は。現在顧問団４人と実務委員10名程、私も実務委員に加えられておりますが、ボランティアの形で働いています。以下にその他の活動をお書きします。

＊アメリカのフラー神学校支援の国際神学シンポジウムが有り、３月27日には昨年に続き、災害を実践的で神学的に捉えて「第２回東日本大震災国際神学シンポジウム」を開催。

＊首都圏災害対応プログラム。これから必ず起こると言われている東海、南海地震などを視野に入れ、それに対して無関心ではなく、備えをして行く必要性を

教会やクリスチャンに訴え、啓蒙及び組織作りを進めて行く。
＊被災地ネットワーク支援は子供保養プロジェクトと被曝計量の配付支援を継続
証言集会を兼ねた出版記念講演会。

福島は東京では知られていない程高度の被曝状況にあり、福島の未来が全く見えないと言う現実があり、不安があり、現実を理解して欲しいと言う願いがあります。

ここにDRCnetの活動の一旦をお書きしました。１つ１つが大切な働きで、それだけに、祈りと、エネルギーと、資金が必要です。皆様の心の内に覚えて、これからもご支援いただければ幸いです。

芳賀先生ご夫妻とお交わり

宮城県は気仙沼市の
阿部克衛兄から

スイス日本語福音キリスト教会の皆様
尊き主のみ名を賛美いたします。

先日、スイス教会から、いのちのことば社のご紹介で、貴教会創立２０周年記念誌を当社にて印刷の注文メールを頂き驚きました。世界中のクリスチャン同志、全て神様の御手の中にあることを知り感謝いたします。

２０１１年3.１１の震災は私たち家族、会社、教会にとって大変な試練でした。今年も3.11が近づいておりますが、長い年月が経ったような、昨日のことのような、複雑な気持ちです。復旧、復興は進み物質的には満たされつつありますが、２年目を迎え昨年とは違って心のケアが必要となってまいりました。

この度、私たち家族の津波体験の証の本をお送りさせて頂き神様の素晴らしい恵みを皆様とともに分かち合うことが出来ますことを感謝いたします。震災3年目を迎え、神様のさらなる助けに寄り頼みつつ自立が出来るように励んで参りたいと祈っております。

さて、スイス日本語福音キリスト教会のHPを早速拝見いたしました。松林兄の証を読ませて頂きびっくりいたしました。芳賀先生には生前私たちも大変お世話になりました。長女が大学生の頃から小金井教会に通っていました。長女は芳賀先生を東京のお父さんと言って慕っており先生から信仰の訓練と教育を受けて小金井教会の支援を頂きながら現在、南アジアでウィクリフの宣教師として働いて居ります。芳賀先生には気仙沼に何度も来て頂き、津波で流されたコイノニアハウス(ゲストハウス)にお泊り頂きました。秋先生にも震災後何度かお会いし、支援物資など送って頂き大変お世話になりました。

松林兄がスイスの教会と聞いてもしやと思いましたが、本当に神様のなさることは時にかなって美しいと思いました。主のみ名をほめ讃えます。

あいりん社物語
http://www.j-m-f.org/airin.html

阿部克衛兄ご家族の証が本となり、英訳もされてスイス教会に贈られてきました。お読みになりたい兄姉は受付まで。

主の働き人として

オアシスチャペル 利府キリスト教会
牧師松田牧人、教会員一同から

スイス日本語福音キリスト教会の皆様
感謝して 主イエス・キリストの御名をほめたたえます。この度も、菊地祥彦神学生のために尊い献金をお送りくださり、心から御 礼を申し上げます。スイスと日本の被災地がこのような形でつながり、共に主の働きができます幸いを感謝しています。

菊地兄の神学生としての学びは丸2年を迎えました。震災後の混乱と、今に至るまで継続されている支援活動により、働きと学びとのバランスを取るのに苦労している様子が見受けられた2年間でした。

しかし、神様が与えてくださった貴重な経験の中、今しか出来ない学びを与えられているように思っています。 新しい年度は、これまでよりも踏み込んだ形で聖書を学びながら、同時に牧会の実践における訓練にも力を入れていきます。スイス/ドイツの地で信仰を与えられた若い兄弟が、主の働き人として整えられるよう、引き続き、皆様のお祈りをよろしくお願い申し上げます。

心から感謝しつつ、皆様の上に神様からの豊かな祝福がありますようお祈り申し上げます。

若者への伝道のために

東京都は江東区の
オーニンガー玲子宣教師から

去年の11月末に、一緒に牧会している波多牧師と賛美リーダーが指導しているクワイアーに、超有名プロデューサーから、都内高級ホテルのディナーショーで本当のクリスマス礼拝をしたいと声がかかりました。その結果、12月の24日25日の二日間で、700人近い人たちが4万円のディナーを食べながら福音に触れることができました。

また、これをきっかけに、クリスチャンでないクワイアーの人たちも聖書を知りたいという思いが強められ、3月から聖研が2グループ6人増えました。31日のイースター礼拝では、ゴスペルを通してイエスさまに出会った二人の女性が洗礼を受けられます。

Youth Focusには10月からブラジル人宣教師が加わり、ヒップホップダンスを用いての伝道が始まりました。また、公園で知り合った若者たちとも、少しずつですが交流が生まれています。これからも、若者伝道のために、そして広い新会堂探しのために、共に祈ってくださると幸いです。

皆さまの上にも主の復活の喜びが日々ありますように、心よりお祈りしています。

◇◇◇ スイス日本語教会からのお便りを紹介します ◇◇◇

スイスでも祈っています

スイス日本語福音キリスト教会
ブルーリボンの祈り会代表 松林 幸二郎

スイス日本語福音キリスト教会の人たち
前列右から三人めが松林さん

「神のなさることは、すべて時にかなって美しいと、祈りながら十余年活動してまいりました。主が全ての事を明らかになさるまで、そして、それら全ての事が益となされることを信じて祈ります。……

横田早紀江」

スイス日本語福音キリスト教会・ブルーリボンの祈り会からの寄せ書きに感謝して送られてきた、横田早紀江さんの手紙です。その端正で美しい筆跡の礼状のコピーが、私の聖書のしおりになっていて、毎朝のディボーションのたびに目に入ります。

私は、日本への里帰り中に拡大祈祷会に二度出席しました。横田さんのお話に、想像を絶する苦しみと涙の川を渡ってこられた経験の中で培われた、何事にも屈しないけれども、しなやかな精神を感じました。その姿を思い出しながら、全てをご存じで全てを治めておられる全能の主にお祈りしています。

スイス日本語教会のブルーリボンの祈り会は、2007年にミラノで開かれた第24回ヨーロッパ・キリスト者の集いで私と同じグループに参加し、「ヨーロッパにもブルーリボンの会を!」と尽力しておられたI夫妻の働きかけによって発足しました。拉致問題や5人の拉致被害者の帰還などについては知っていましたが、横田さんが苦悩と絶望と悲しみの中で神様に出会いクリスチャンになられたこと、そして横田さんを囲む祈り会が毎月いのちのことば社でもたれていることは、その時まで知りませんでした。

スイスの祈り会では、礼拝後、重荷を負う会員たちが祈りの輪を作っています。会員からの寄せ書きを、「祈りが形をとったもの」として横田さんにお送りしています。また月末には、「毎月1日は世界一致祈りの日、欧州ではその日の午後9時に心を合わせてお祈りします」というお知らせをメールで送信しているほか、Iさんが送っている「横田早紀江さんを囲む祈り会」(東京)での横田さんの近況報告など、メッセージの録音ファイルをコンパクトサイズのMP3にし、スイスだけでなくヨーロッパのブルーリボンの祈り会メンバーにお送りしています。

このたびリニューアルしたスイス日本語教会のホームページ www.jegschweiz.com にブルーリボンの祈り会サイトを特設しました。「百万人の福音」に掲載されたブルーリボン・レポートを読めるほか、録音ファイルをダウンロードすればいつでも聴けますのでご利用ください。

■横田早紀江さんを囲む祈り会■ 世話人:斉藤眞紀子 連絡先:☎03-3413-7861 FAX 03-3413-0885

「百万人の福音」いのちのことば社 2013年4月号より